

反障害通信

17. 12. 12

67号

墓穴を掘る安倍首相を墓穴に落とそう

もりかけ問題(森友学園・加計学園問題)で安倍首相は、まさに墓穴をほり続けています。安倍首相自身が「水戸黄門の印籠ではあるまいし」と言い、「(官僚たちの) 忖度などない」と言い切りました。漢字を読むのが苦手な、ルビを官僚からふってもらっている首相が、日常用語で使わない「忖度(そんたく)」という言葉を使った時点で、誰もが「そうか、忖度ということ期待している政治をやっているのだ」と思いました(ちなみにわたしはそれを「印籠—忖度政治と名付けました」。

更に、安倍首相の口癖に「わたしが最高責任者だ」があります。「行政府の長」というところを言い間違えて「立法府の長だ」とまで言いました。そこで思ったのは、このひとは三権分立もきちんと押さえない、権力を振り回すひとだということです。しかも、内閣人事局を作り、官僚の人事権を官邸で握りました。そして特定秘密保護法を作り、内部告発など起きにくい状況を作りました。そして、森友問題で、安倍首相をかばったひとを国税局の局長に栄転させました。一方、加計学園問題では、忖度をしなかった文部省事務次官を辞任に追い込みました。これで、どうして「忖度など起きない」と言い得るのでしょうか? むしろ忖度が極めて起きやすい状況が作られている、と言い得ますし、わたしは忖度が起きないはずはないとまで思うのです。

さて、もうひとつの安倍首相の好きなことばがあります。それは「悪魔の証明」という、「ない」という証明はできない」ということです。「自分は、潔白だけど、「ない」という証明はできないから、潔白が証明できないだけだ」という話です。そこで、野党から「李下に冠を正さず」という諺をもって、「政治家たるものは、疑われることはやらないものだ」という指摘をされると、こんどは「今後は、「李下に冠を正さず」という諺があるから、疑われるようなことはしないようにします」と言い出しました。「李下に冠を正さず」という言葉の使い方を知らないのです。「李下に冠を正さず」というのは、やる前の信条です。やった後は、「李下に冠を正さず」ということがあり、疑いをもたれることをやってしまっ、政治不信を招いてしまった。その責任を取って・・・」ということなのです。

さて、「わたしが最高責任者だ」と言い、閣僚が数々の不祥事を起こしたとき、いつも「任命責任はわたしにある」と言います。その言葉の後には、普通は「責任をとって・・・」と続くのですが、「責任はわたしにあるけれど、責任はとらない」という信条のようです。一体どうしてこんなおかしい政治がまかり通るのでしょうか?

墓穴掘り続けているのに、墓穴にどうして落とせないのかという思いもありますが、まずはうそとごまかしの政治にきちんと怒りをもって、理論的なことを民衆の側からも提起し、それを広げて行く活動が必要なのだと思うのです。(み)

永田町に出没する狸の話（1）

永田町に出没する狸、おぼっちゃま狸の話を書きます。

この狸は狡猾だと言われています、穴掘りが得意で、ひとを穴の中に落とそうと、いろいろ穴掘りを続けています。よく見ると、所詮狸の浅知恵で、墓穴を掘っているとしか思えないのですが、穴に落ちているひともいる現実があるので、注意を促すためにその穴掘りの話を書き置こうと思います。

このおぼっちゃま狸の口癖は「わたしが最高責任者」で、そのことばと共にボス狸ぶりを発揮します。おまけに何を勘違いしたのか「私が立法府の長だ」と口をすべらせました。これはもちろん「行政府の長」の間違いですが、何でも自分の言いなりになると思っているおぼっちゃま所以のところで起きた勘違いかもしれません。そして内閣府に人事局を作り、官僚の人事に口をだそうとしています。そして、官僚の中でおぼっちゃまボス狸に逆らうものは辞任に追い込む、そのために働くひとを栄転させています。

そして、訊かれもしないのに、自ら「水戸黄門の印籠ではあるまいし」という話をし、「(官僚は)付度などしない」と言いました。これを見ていると、そういう言葉をだすこと自体、どう見ても「印籠—付度政治がはびこっている」としか思えません。それに出世よりも本来の公務員の役目として国民の公僕としてあろうとするひとには、「特定秘密保護法」を作り、内部告発しにくい状況という穴掘りをすでにやっていました。

このはなしにはいろいろ続きがあります。自分の連れ合いのおじょうさま狸をおぼっちゃま狸は「私人」だとか言っていますが、公務員の秘書が何人もついていて、そのひとりが「(ボス狸)夫人付き」と肩書きをちらつかせて FAX を送ったりしています。むしろ「付度が起きないはずはない」と言い得ます。繰り返しますが、「付度」という言葉を自ら持ち出したのです。幾重もの墓穴掘りです。

さて、もうひとつ、自ら「腹心の友」と言った友達との疑惑問題です。以前から疑惑の問題にされて、このひとが口にするのは「悪魔の証明」です。これはどうも、「ないということとは証明できない」という意味のようです。そこで、「わたしは潔白だけど、それは証明できないだけだ」と開き直るのです。ところで、「李下に冠を正さず」(*註)ということ追及されると、今後は「李下に冠を正さず」ということで活動していきと言ったりしています。そもそも何を言っているのか分からないのです。「悪魔の証明」ということで、ないということとは証明できないから、疑惑をもたれるようなことをしてはならないということが、「李下に冠を正さず」という意味です。それが「腹心の友」として頻繁にゴルフを一緒にやり、お食事も何回も繰り返しています。すでにしてしまってから、「李下に冠を正さず」と言っても遅いのです。そもそも、自分が「悪魔の証明」などという言葉に口にしてきたのは、「李下に冠を正さず」と真逆なことです。「李下に冠を正さず」というのなら、自分が首相になった時点で、疑われるから自分がボスなど利益供与的關係にある間は、友達づきあいを止めようということが、「李下に冠を正さず」ということだったのです。「李下に

冠を正さず」ということで今後やっていくのなら、既に疑われることをやってしまったことの責任を取ってからにすることです。

さて、このおぼっちゃま狸は「責任」ということばをよく使います。自分の子分が不祥事を起こすと、登用責任(任命をした責任)を口にします。ただ、「責任はわたしある」と口にするだけです。「責任」ということばは、普通「責任を取る」ということで使う言葉ですが、この狸には「責任を取る」という考えはないようです。狸の世界はそうなっているのでしょうか？ そもそもフクシマ原発事故が起きる前に、第一次組閣してボスの地位にいたときに、原発でメルトダウンが起きる可能性をとわれて、「可能性はない」と言っていたのです。ですから、そもそもその言葉の責任からして、ボスの地位に復活するなどありえなかったのです。おまけに、原発再稼働を進め、輸出まではかり、「死の商人」と言われる武器の商いの役割まで担い、戦争できる国作りをしています。一体、この責任という観念がないこのボス狸の穴掘りをいつまで許しておけるのでしょうか？ このままでは、ひと総体が穴に落とし込まれます。このおぼっちゃま狸は狡猾で、いろいろ周りの狸を使って、自分が危うくなると、穴を作って落とし込みます。自分を追い詰めるひとたちを、一体何人、えん罪や、自分のやってきたことからすると責任は軽微なことにも責任をとらせて、穴に落としたでしょう？

もうぼつぼつ、おぼっちゃま狸たちが作った墓穴に狸たちを封じ込め、穴をつぶしてしまいませんか？

もう一匹、永田町と新宿界隈に出没している狸の話、「排除」ということばを口にして墓穴を掘った緑の狸の話を書きたいのですが、紙面がありません。「同じ穴のムジナ」ということだけ書いておきます。

*註 [文選古楽府、君子行「瓜田不納履、李下不正冠」](李の木の下で冠の曲がっているのを直すと、李の実を盗むのかと疑われるということから) 他人の嫌疑を受けやすい行為は避けるようにせよの意。「李下の冠」とも。[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

追記

狸さんにあやまらねばなりません。狸さんたちは自然の生態系の中で生きていて、ときには、ひとに生態系を破壊されることと相即的にひとに害を与えることはあっても、決して、「おぼっちゃま」たちのようにひどい存在ではありません。例に使ってすみませんー

読書メモ

今回も、雑多な学習になりました。廣松派のひとの本を読み、10・8の50周年ということで、左翼運動の総括のようなことが課題になり、断絶された現在の運動とつなげて本を読んでいた。間に、障害関係の本をはさんでいます。左翼運動の総括は、マルクスレーニン主義ということへの批判としてあるのではという思いから、レーニン批判のためにレーニンを読んでおかななくてはと、読み始めています。

・日山紀彦『廣松思想の地平: 「事的世界観」を読み解く』お茶の水書房 2016

この著者は廣松シェーレと言われているひとたちのひとりです。

久しぶりに廣松さん関係の本を読みました。著者が「あとがき」に書いていますが、難解な廣松さんの本を読みやすく解説するのではなく、自らが廣松思想をテキストクリティクしていくという自己ノートの的に書いてあるので（Ⅰ部とⅡ部）、廣松思想を知らないひとが読むと、もっと難しくなっています。廣松さんの本を読み込もうとしているひとにとって、すーっと読める本なのです。

Ⅲ部は中国の南京大学の張さんの廣松批判との対話、補論は物象化論の歴史を押さえようとしていて、物象化論に関する重要文献のひとつになっていくのではと思える論攷です。

さて、Ⅰ部Ⅱ部は廣松さんの論攷の自己ノートで、だいたいすーっと読んでしまいました。後でこの部分の切り抜きメモを残します。

日本思想界のひとの名前を出して、「巨星」3Pと評価していますが、むしろ世界的に位置づけられること。廣松さんの思想は翻訳の問題があって世界的に広がっていないのですが。

サルトルのことば「マルクス主義の（のりこえ）を自称するものは、悪くするとマルクス以前の思想へのあと帰りになるし、よりよい場合にも、のりこえたと信じられた哲学のなかにすでに含まれていた思想の再発見にすぎない」23P

「諸個人の「生」の社会的具現のための実践すなわち「対象的活動として労働」こそが、人間的把握の基底に据えられるべきだという視座である。」149-150P・・・今村仁司さんの提起から労働と仕事の区別の必要性、労働の特権化に陥っている

社会の物象化としての社会実体論 154P

「社会的諸関係の第一次性、実体的個人の第二次性」156P・・・「実体的個人」？

第Ⅲ部が、今、話題になっている張さんの『マルクスに帰れ』の中の、廣松批判との対話です。わたしは購入していますが、いつものようにまだ「積読」状態です。

張さんの本を読んでから書くことですが、日山さんの批判にとりあえずほぼ納得しています。

張さんの廣松批判の問題性を日山さんは二つ指摘しています。一つ目は、「仮象」「仮現」とかいうことばを廣松さんが使っているのは、ものが散在すること自体を否定することになるという張さんが批判しているという話です。日山さんは、四肢構造論というところで反批判しているのですが、四肢構造論という全体的なところより、<そのもの>—「それ以外のもの」「それ以上のもの」というところで、<そのもの>の存在を否定するのは懷疑論に陥ると廣松さんが指摘しているところを持ち出したら、分かりやすいのではないかと思います。だから、「仮想」ということばが妥当かどうかはあるにせよ、張さんの指摘は読み違えとして指摘できます。そもそも「仮象」「仮現」という指摘は翻訳の問題があるのではと思うのです。「仮象」「仮現」ということばを廣松さんが使っている記憶がないのです。わたしは記憶が苦手なので、あやふやですが。このあたりは張さんの本をあたってから、再度読み込んでみます。

張さんのもうひとつの指摘は、「物象」や「物象化」ということばよりも、「事象」ということばがよいという指摘は、そもそも、廣松さんは「物象化」ということを物象化批判

の脈絡でだしていること、そのあたりは、構築主義が構築主義批判ということと区別なく用いられていることに通じることです。廣松派の小林さんが廣松さんの「事」を、実体化に陥るとして「ことなり」と読み替えることへの、批判にも通じます。そもそも、「ものからことへ」と突き出したのは実体主義批判として出していることで、そのことを押さえれば、わざわざ置き換えるのは、そもそも物象化ということばがどのように使われているのか、事という言葉がどのように使われているかを押さえていないのではないかと逆に思うのです。

この部分の切り抜き

「物」と区別して……。これはわれわれにはわからない。」218P・・・小林敏明「ことなり」の提起に通じること

「史的唯物論の『物』は、自然物の上に立つ [受肉した] 社会関係的存在なのである。」221P・・・「上に立つ」・・・スターリン的史的唯物論における自然弁証法の上に立つ唯物論への批判

物象化と物象態 227P

さて、補論は、物象化論の歴史とも言い得ることです。マルクスの埋もれていた「物象化」の概念を掘り出したのは、ルカーチです。個人的なことを書いておくと、わたしも廣松―マルクスの物象化概念を押さえる作業の中で、ルカーチの『歴史と階級意識』を読みました。物象化論の学習の必須文献というところになっていくことではと思います。もっとも、ルカーチ批判もさまざまになされています。この著書で書かれていることも、既に書かれていたこと。さて、ルカーチの物象化論も、ルービン―コーン論争などを通して（ルービンの評価は廣松さんの改訂新版の『資本論の哲学』で取り上げられています。）、ロシア・マルクス主義によってルービンもルカーチも断罪されていくという著者の指摘。それが60年代から、再び取り上げられていくという歴史。

さて、この部分の抜き書き。

マルクスの用例物象化・物化ということば 243P

個人と社会、人間観 246P

たわしの読書メモ・・・ブログ 411

・『季刊福祉労働 156号 特集:障害者の「働き方改革」』現代書館 2017

かつて「障害別」を超えた全国的「障害者」団体の交流会の分科会では、労働の分科会を選択することがあり、また裁判支援で「障害者」の就労状況をインターネットで検索したりしていたことがありました。その学習の続きのようなこととして、参考になったのですが、「そもそも労働とは何か」のようなことを考えているわたしの立場で、その関心事にはひっかからず、ざーっと読み流してしまいました。

たわしの読書メモ・・・ブログ 412

・野間易通『金曜官邸前抗議 ---デモの声が政治を変える』河出書房新社 2012

シールズや反原連の運動についてときどき議論をしているひとに勧められ、借りて読ん

だ本です。この著者の本には、ブログ 358 での対談本・笠井潔×野間易通『3. 11 後の叛乱 反原連・しばき隊・SEALDs』集英社(集英社新書)2016 で読書メモを残しています。また反原連の活動に関しては、シールズとの対話も含んで、ブログ 329 で・討議・小熊英二×ミサオ・レッドウルフ×奥田愛基「<官邸前>から<国会前>へ」(『現代思想 2016 年 3 月号 特集=3. 11 以後の社会運動』青土社 2016 所収) の読書メモを残しています。

さて、この著者は反原連のメンバーのひとりですが、このひとが反原連の運動を「体現している」というような感じではありません。シールズも代表者をおこななかったし、反原連も代表を置かない運動だったのですが、シールズの場合奥田さんが「体現」しているという感じで、反原連はミサオ・レッドウルフさんが「体現」しているという感じがしています。そもそも、反差別運動や反差別的「市民運動」には、「誰も代表しない、代表させない」という形での運動があり、「体現」という言葉を使うこと自体に批判があるのですが、それでも、リーダーシップということがあり、一応押さえておく必要があります。この著者は、メンバーとしてそれなりに深く関わりつつ、それでも支えるという感じになります。ですから、たぶん、他のコア・メンバーからすると、違うという意見が出てくるとは思います。

読みながら首を傾げていたこと、いくつかの疑問のような思いをもったことを書いてみます。運動の総括は当事者が中心になってやっていくことです。ですが、論理性においておかしいことや、別の形で運動している立場から、総括ということは今後の活動に活かすこととして、総括を自分の運動でやっているものとして、総括ということ自体を共有化していくためにも、そのような観点での提起は可能だし、やっていくことだと思います。

さて、本題に入ります。

ひとつは、著者が運動が大きくなっていくときに、これ以上大きくなり、警察とぶつかり、ケガ人や逮捕者がでたらどうしようと不安に駆られていたということを書いているのですが、この発想がわたしには分からないのです。この著者の言っていることがどこまで全体化していたのか分かりません。実際に混乱して早く中止にしたり、全体判断していないのに、誤情報として中止のアナウンスをしたりしているので、少なからず、メンバーが総体的に不安に駆られていたようなのです。もちろん、集会をケガ人を出さず、逮捕者も出さず無事に終えるということも必要ですが、そもそも目的は、再稼働阻止一原発を止めることにあるわけです。ケガ人や逮捕者を出さないということを一番の目的にするのなら、集会を中止にすればいいだけです。集会を大きくしていくためには民衆の怒りを引き出し増幅させていくことが必要なのだと思いますが、反原連の運動ピーク時の行動は民衆の怒りをむしろ抑え込む方向で主催者が動いたのではと思います。そのあたり、官邸前に向かって決壊的に進んでくる民衆にスタッフが警察との衝突回避のために民衆に向き合うように立っていた、それが民衆に対峙していたかのようにとらえられてまづかったというようなことも書いています。そもそも何のために集会を開いているのかわからないような発想がおかしかったのではないのでしょうか？ もちろん、スタッフ自体が初めての経験の中で不安に駆られ、十全にできなかったことを後付け的に批判することではありません。ですが、それは総括として後の活動に活かすこと、そのような意味でこの文を書いておきます。実際、この官邸前・国会前の活動に学びながら出てきた国会前のシールズの活動では、どう

も自らどう決壊を引き起こすかまではいかなかったけれど、決壊に乗って、警察の集会を押し返さなうというところで規制線を引いたことを突破する行動をしたことがあります。ただし、シールズも集会破壊や集会を押し返さなうとする警察の規制に十分対応できていなかったのではないかと思います。それは以前から書いているのですが、警察との対応問題のおかしさです。それが疑問の二つ目ですが、その前にひとこと、ケガ人や逮捕者を出さないという設定をしたということでは、むしろ主催者自らがケガをしても逮捕されても、なんとしてでも止めるという運動に踏み出せなかったのかと思うのですが、どうなのでしょう—これは、後にシールズで活動していた学生が、「ボクは死んでもこの戦争法案を止めたい」とか言っていたのを見たのですが、そのような決意性をもった反原連の運動ではなかったということではなかったということなのではないでしょうか？ もちろんシールズも総体的に「死んでも」という運動ではなかったのですが、このあたり、原発震災後の反原発の初期の運動で、素人の乱の新宿デモで逮捕者を出して、運動がしぼんだことの総括のようなことの問題があります。なぜしぼんだのか分からないのですが、それは、疑問の三で書きます。

さて、疑問の二つ目、この本の中でもとらえられる警察の動きの押し返さなうへの疑問です。警察が本当の敵ではないというところで、「真正面からぶつかるとすべき相手ではなく、おだて抱き込みうまくかわす対象でしかない。」133P ということですが、管轄の麹町署との交渉とかしているのですが、警察の押し返さなうが甘いと思えません。管轄が対応しているのは、集会が交通整理段階の運動規模の時です。その管轄の段階でも折り合いがつかないのですが、集会の規模が大きくなると、警察は機動隊が前面に出て、「国家意志」の体現者として現れ、集会の規模を小さく見せる、集会そのものを破壊し、解散させようとします。その時にどうするのかという問題があります。「おだて抱き込みうまくかわす」なんて、できようがないのです。民衆の力で押し返すしかないのだと思います。このあたり、ゆらぎがあったようです。むしろ、何とか民衆を押し返さなうとしていたところもあったようです。そのあたりがどうも分からないです。

疑問の三つ目、ケガ人や逮捕者がでると運動がしぼむと思っているようなのですが、それは「素人の乱」の新宿デモで逮捕者が出て、それが運動がしぼむ原因になったということから来ているようなのですが、それは逮捕者が出たときにきちんと対応する態勢をつくっていないということがあったことがひとつ、もうひとつはどうも分からないのですが、逮捕されたひとつ、開き直ってより運動にのめり込んでいく場合もあるとわたしは考えるのですが、そのあたりの時代精神のようなことが分からないのです。

四つ目、どうも反原連は左翼嫌いのようなのです。総体として左翼嫌いかは別にして、繰り返し左翼嫌いの言説が、ちゃんと批判されることもなく繰り返されている状況はあったようです。どうも、分からないようなのです。反原連がシングルイシューの立場をとり続けていることとつながっているのですが、そもそも原発がなぜ続けられようとしているのかというところで、資本の悪無限的利益の追求で、ひとの命よりカネが大切ということがあり、そこで資本主義社会の構造なりがとらえられると思うのです。また、そもそも反原発の立場のひとたちは、いろいろな社会の矛盾をとらえて、そこでの批判の意志と反原発ということがつながっているのではないのでしょうか？ そうすると左翼嫌いということ

は、総合的矛盾をとらえることを拒否するとかいうところにおいてしかなりたちません。また、そもそも反権力ということに至らないので、弾圧を受けるとしぼむという運動になってしまいます。そのあたりの議論がたぶんなされないまま、揺らぎの中に反原連は漂っていたのでしょうか？ このあたりの左翼嫌いの言説には、むしろ左翼側の総括がきちんとなされないままであったという、左翼側の責任があるのだと思います。実はこの本を読む前に『情況』の 67.10.8 特集を読んでいました。ひとつの総括、総括の始まりです。左翼アレルギーのようなことがなぜ、起きたのかの総括が必要になっていると思います。

これについては次々回のブログにもつながります。また、そのあたりのことは、ちょっと文を書き始めています。

さて、いつものように切り抜きメモです。

「同時に礼儀正しく秩序を好み暴力的な雰囲気や騒乱を望まない。これは、それまでの運動ではあまり重視されてこなかったふるまいだ。しかし、それこそが、じわじわと政権を揺さぶる可能性を秘めているのである。」101P・・・秩序の中で何が進んでいくのか、ということをとらえられなかった。民衆の怒りを必死になって押さえ込む方向で動いてしまった。そもそも官邸前コールの暴力性をどうとらえるのか？

「安全確保」130P

「お前の大好物のカクメイなんて犬にでも食わせちまえ」131P・・・左翼嫌いの言説

「それらの提案や批判が、官邸前の抗議の目的とはなんの関係もなかったからである。」

132P・・・その後の再稼働阻止の運動が「アベ政治を許さない」の運動と結びついていってこと、反原連がシングルイシューの運動から 2015 年 7 月からの 12 団体との共闘を呼びかけたこと、しかし、シングルイシューから脱しきれずに、その共闘の運動がその後どうなったか、の総括が必要だと思います。

「真正面からぶつかるべき相手でなく、おだて抱き込みうまくかわす対象でしかない。」

133P・・・うまくかわせなかった。国家権力の意志を体現してくる警察を甘く見ている。

「(警察を鉄柵に例えて、その隙間から・・・引用者註) 石つぶてを投げれば良い」133P・・・非暴力を唱えている運動で、たとえが良くない。単に言葉の暴力的なことで、運動の実態と合わないことばだけの「石つぶて」を投げただけ。

「非暴力不服従からさらに一歩さがった」134P・・・実力闘争をやらないということなのか？ これはシールズにも通じていくこと。それを誰か(註*)や民衆が「決壊」という形で少しはやった。大飯の時も現地では実力闘争に踏み込んだ。それを温度差のように書いているのですが、民衆の前の方では同じような温度で現地と連帯する熱はあったのではないのでしょうか？ 沖縄での座り込み実力闘争についても言えます。「非暴力直接行動」というあいまいな言葉をつかっているのですが、問題は実力闘争に踏み込むのか否かの問題なのです。反原連もシールズもそのことを端から否定しようなのです。わたしは何も、首相官邸や国会に突入すべきだったとかいっているではありません。国会や首相官邸に突入して占拠して、臨時革命政府でも作るころまで行けば意味があるとしても、そこまでの状況に至っていないときに、また民衆の意識がそこまで至っていない時に突入しても意味がありません。でも、いろんな形の実力闘争はあったはずで。例えば、戦争法案のと

きは、横浜での地方公聴会で、座り込み一寝っこがりをして、議員を封じ込めて、国会に移動させないことによって、審議をストップさせる、遅らせようとしてきました。

ガンジー主義へのコメント 135-6P

「この器を壊さず維持するためには何をすべきか、具体的にはケガ人や逮捕者を出さないうためにどうすればよいかということだけだった。」 137-8P・・・本末転倒

「これはすでに自分たちの手に負えない事態になっているのではないか、私の頭からそんな不安がなかなか払拭されなかった。」 153P・・・どうも分かりません。それが総意なら、集会主催者を降りればいいことです。そこで、新しいちゃんと担える新しい主催者が出てくる可能性があったのではないのでしょうか？

たわしの読書メモ・・・ブログ 413

・「生きてる！殺すな」編集委員会『生きている！ 殺すな—やまゆり園事件の起きる時代に生きる障害者たち』山吹書店 2017

やまゆり事件が起きて、「骨格提言」の完全実現を求める大フォーラム」に集まっているひとを中心にして、「一人ひとり違う障害者の現実を「知らせる」本を作りたい」（「刊行にあたって」3P）と作った本のようにです。

一人ひとり抱えさせられている問題の「違い」があります。障害問題に限らないのですが、一人ひとりが自分のことを書いていくと、それで本が出せます。そして自費出版も含め膨大な本が出ています。わたしはその中における「普遍性」のようなことや原理論的なこと、そして運動論のようなことを考えているので、そこまで手が伸ばせていません。それでも、「課題別」のことや運動に関することと出された本の中で書かれている、ライフヒストリーのようなことを読んできています。現実の矛盾をとらえ、差別に対する怒りを共有化する作業をしていて（怒りのようなところまで、至らないところでは、なぜ、至らないのかをとらえながら、怒りを潜在的に読み解こうとしています）、それがわたしの運動のそして運動のための理論化の作業のエネルギーにしています。そのようなところで、この本も読んでいました。

やまゆり園事件が起きたとき、事件を起こしたひとり U だけの問題でなく、それは優生思想が起こした事件だということで、「障害者」自身も、自分自身を否定的にとらえる、医学モデル的に自分も持っている「障害」を否定的にとらえることにリンクしていることとして、そして「障害者」に介助者として関わる人たち自身が「障害者」と日々接する中での軋轢のようなことと(切断しつつも)リンクすることとして、問題の所在をとらえかえそうとしています。

もうひとつ、施設の前職員が起こした事件ということで、改めて施設ということ自体をとらえかえそうということ、この著書の中で何人ものひとが書いています。そして、それは施設だけの問題だけでなく、この社会のあり方全体につながっているのだとも言えます。

さて、もうひとつ、最近わたしは政治的な活動に開いて行っているのですが、政治情況がひどくなっていく中で、真っ先に被害を受けるのは、社会的弱者で、「障害者」自身が被害を受ける、そしてそのような弱者切り捨ての政治情況、そのような言説の広がりやま

ゆり園事件が起こり、またいろいろなことが起きているという話も出ています。そういう中で、生きること自体が闘争という側面もあって動きにくいという側面もあるかとは思いますが、なぜ主体的に動いていかないのかというとき、わたしはそもそも、運動主体としていかに確立していくのかという問題があるのだらうと思います。

そういうところで、この本の共著者の中の一番若い運動志向のひとで、親と一緒に生活しているひとが自立生活運動に踏み込んで行こうと計画を立てているという話がでてきます。自立生活運動というのは、まさに運動主体を確立していく上で必要なのだと思います。もちろんもっと幅広く生きていく上での当事者主体の形成という意味もあるのでしょうか。そのことをこの本を読みながら、改めて感じていました。

たわしの読書メモ・・ブログ 414

・『情況 2017年 10月号 [雑誌]特集 ロシア革命 100年 10・8羽田闘争から 50年』情況出版 2017

ロシア革命 100年と 1967.10.8 羽田闘争 50年が丁度重なっていて、ダブル特集になっています。他の雑誌でもロシア革命 100年をとりあげています。世界史的な歴史的な総括は膨大な資料を読む込む必要があり、これもまだわたしは踏み込まず、廣松さんと廣松シェーレのひとたちの論攷を読んでいて、後は雑誌とかで拾い読みしているだけ、この雑誌のこっちの特集は後回しにして、1967.10.8 羽田闘争に関する特集だけ読みました。

1967.10.8 羽田闘争はベトナムへ佐藤首相が行くということで、日本が米軍の後方支援をしているところで、アメリカのベトナム戦争への加担というところでのベトナム行きを阻止するというところで、当時の三派全学連が実力阻止闘争を組み、山崎さんというひとが機動隊に殺されたのです。今回の特集の中で、ベトナムの解放戦争に連帯した日本の闘いがあったということを示してもらうということで、訪越団を送ったのですが、で、特集の中にベトナムに行ったひとたちのインタビューとかも載せられています。当時の、明かされていなかった事実関係が明らかになっています。全国全共闘の議長だった山本義隆さんがいろいろ資料集めとかしたようです。

さて、わたしは世代的には団塊の世代なのですが、育ったのが佐世保で 68 エンタープライズ阻止闘争の熱気は高校 3 年で共有しているのですが、当時のわたしは思想的にはノンポリのどちらかというところと保守的な考えでした。60年代末から 70年初頭の反乱の時代に遅れてきた立場で、いろいろ伝え聞く、ちょっと本を読んでいるだけで、余り情況をつかめていません。羽田阻止闘争も訪米阻止として間違っって押さえていました。そして、それもカンパニア闘争的にとらえていたのですが、この闘争は初めてヘルメットをかぶりプラカードという形を取りながら角材を持ち出した、実力闘争で本気で止めるというところでの闘争でした。野間さんの本の中で、鉄柵の話が出ていました。最初はスクラム、後に鉄柵という形で警察は阻止線を引いたのですが、いわば鉄柵を超えることとして機動隊の阻止線をゲバルトで超えようとしたことです。さて、このゲバルトをどうとらえるかです。ガンジー的非暴力主義や宗教的非暴力主義ならば、いかなる暴力も許されないとあります。たとえば、当時日本共産党は南ベトナム解放戦線のアメリカ帝国主義の闘いを支持していました。で、三派全学連のゲバルト的な闘いは批判していました。ベトナムでのアメリカの

「侵略」戦争に対する反戦というところでの闘いでゲバルトの実力闘争を否定するのかというはなしです。もちろん、ここでゲバルトの実力闘争と実力闘争そのものは区別されるのですが。小熊さんは、マイノリティの運動だから過激化したと書いていましたが、むしろ民衆的総体的意識としては、少なくとも 2010 年代より意識は高かったのです。そこで、ゲバルトも含んだ実力闘争を許容する民衆の意識はあったのです。その後の過激派キャンペーンの中で、そのような民衆の意識が潰されたのだと思います。誤解のないように、断っておきますが、わたしは反差別主義で反暴力主義—根源的反暴力主義です。そもそもこの社会が差別—暴力で成立し、暴力に満ち満ちているときに、非暴力主義ではありえないと思っているのです。

さて、この特集は 10.8 に至るまでのブントの再建とかのことも書かれています。また、三派全学連で共闘していたセクトの内部対立でのゲバルト問題とか出ています。最初の小競り合い的なゲバルトがどうして起きたのか、よくつかめませんが、中核派による、全学連書記長だった解放派のメンバーへのゲバルトは、まさにセクト主義です。ブント内部での対立も共闘が一定ある中で、ゲモニー争いの中でのゲバルトの行使。権力闘争でのゲバルトの行使とははっきり区別すべきで、党派どうしのヘゲモニー争いにはゲバルトを行使してはならないという原則がなぜ打ち立てることができなかったのでしょうか？ このあたりの総括のようなこと、その後「内ゲバ」と言われたことの始まりのこととして、きちんとおこなっていくことです。

たわしの読書メモ・・ブログ 415

・『現代思想 2016 年 3 月号 特集=3・11 以後の社会運動』青土社 2016

この特集のメイン的にあった討議で、ブログ 329・討議・小熊英二×ミサオ・レッドウルフ×奥田愛基「<官邸前>から<国会前>へ」の読書メモを残しています。

特集の残りの部分を読みました。

小倉さんと木下ちがやさんと思想的なつながりを感じます。それが、ミサオさんや奥田さんまでつながっているような感じなのです。どこから来た系譜なのかまだよく分かりません。サンディカリズムというイメージがあるのですが。ただ、何か押さえ損なっていると感じているのです。

関西シールズの女性ふたりへのインタビューの記事がとても感動的でした。迷いつつ運動主体的に自己を確立しようとするその思いが伝わってきます。周りのひとに読むように勧めようと思います。感激して涙しつつ(歳のせいかすぐ涙ぐむのです)、元気づけられる文です。首都圏のシールズのメンバーの「生活保守」的なところではない動きもとらえられます。

台湾の脱原発の動きの報告も元気づけられました。

健康被害とかリスクコミュニケーションという語を用いた、御用学者たちの非論理的な動きへの非論理性の指摘が刺激的で共感していました。今ひとつ、押さえきれなかったのですが、概略つかんだところで、ほんとうに腹立たしく、この御用学者ともいべきひとたちも無責任の系譜の中にいるのですが、きちんと責任をとらせていかなくてはと思うのです。

裁判関係の動きは、わたしも裁判支援をやっていた関係で、国策としてやって来た原発政策を国の機構のひとつである司法がどこまで分立性をもちえるか、わたしは余り期待できないと思っています。むしろ、運動の盛り上がりによって、裁判所も動かしていくということしか道はないのではとったりしています。

この特集はパスしていたのですが、前のブログの本の関係でつながって、取り出しました。やはり、これも最初の想定以上に収穫のあった雑誌でした。

たわしの読書メモ・・ブログ 416

・10・8 山崎博昭プロジェクト編『かつて10・8羽田闘争があった：山崎博昭追悼50周年記念〔寄稿篇〕』合同フォレスト 2017

ブログ414の『情況』で10・8羽田闘争50周年特集を組んでいた中で、紹介されていた本です。

まさに、大きな転換点としてあった「10・8」で、その体験をしたもの、同時代的に、また時代が少しズレても、その影響を受けたものが、「お前は何をしてきたのか」「これからどうするのか」という問いかけの中で生きてきたことをいろんな立場から書き綴っています。そして、山崎さん死亡が、どう見ても、警察官による警棒での撲殺事件としかとらえられないのに、学生側が装甲車を奪い轢死させたというデマを捏造し、マスコミを使ってキャンペーンを流したということはこの本の中で明らかにしようとしています。丁度60年安保の時に樺美智子さんの警察官による虐殺をデモの中での圧死とキャンペーンをはったように。

このデモは佐藤首相がアメリカのベトナム戦争への加担の更なる進行として、南ベトナム訪問をしようとする事への阻止闘争と組まれたもので、60年安保闘争以降、デモがサンドイッチでデモ（サンドイッチは中身が見える、中身が見えないあんパンだというような表記もでています）状態で、抑圧されていくような中で、実力闘争としてヘルメットをかぶり角材を使って機動隊の壁を突破しようとした実力闘争の走りでした。まだ、ヘルメットをかぶったひとの方が圧倒的に少なかったようなのですが。

これから、機動隊の壁を突破する実力闘争が組まれていきます。ベトナムでは戦争でひとが殺され(当時はジャーナリストたちによる報道の自由がまだましで、映像がいろんな形で出ていました)、それにいろんな形で日本政府、日本の企業が関わっている、それを止めるためには、その暴力の行使の極である戦争への加担を止めるためには暴力も辞さないという闘いだっただけです。そして、それは被害者としての運動だけでなく、むしろ自らの加害者性ということをとらえ返した、その加害者の立場を否定する運動にもなった、そういう運動として定立させたという転換点でもあったのです。その思想性は全共闘の「自己否定の論理」にもつながっていきます。そのあたりの加害者性をとらえられないところで、「城内平和」というエゴイズム的なところで切り捨てる、もしくは口だけの連帯を語るのではない、そういう運動としてこの闘いは取り組まれたのだとわたしは押さえています。

わたしは遅れてきた全共闘世代で、「10・8」はノンポリ（政治的意識が希薄）だった高三の時、新聞で見てその内容もよくつかんでいませんでした。その後の、佐世保エンタープライズ寄港阻止闘争は、わたしの育ったところで起きたこと、まさにそのときの市民的

関心が強く、そのときの時代精神というものを体験しています。駅前でカンパを集めたら、一万円札がポンポン入ったとか、高校で「デモには行かないように、もし無断で休んだら処分の対象になります」とかおふれが出て、それでも休んでデモを見に行った同級生が、昼休みに学校に来て報告をして、また見に行くとか出て行ったり、という話もありました。反共だったわたしの父が、高台の自宅から双眼鏡を持ち出して、三派全学連と機動隊の橋の攻防を見ていたり、橋のところまで見に行ったりして、機動隊の打ち込んだ催涙弾が市民病院に流れ込んだりして、市民が機動隊に抗議していたとか言って、「機動隊はひどい」とか言ってたりしていました。そのような市民の支持や共感の話はこの本の中にも出てきます。

その時代精神のようなことが、今、「非暴力直接行動」の時代として、ほとんどとらえられていません(註1)。「非暴力直接行動」ということば自体があいまいです。「直接行動」ということは、議会を通じた働きかけでない、直接の示威行動を指すのでしょうか、問題は実力闘争として展開するかどうかです。非暴力直接行動というとき、その言葉を使うひとの中には、実力闘争を組むと運動が潰されるから、実力闘争を組まないというイメージがあるようです。実力闘争には踏み込まないという事の中には、60年代後半から70年代に至る武闘的闘いの敗北のとらえ返しや、台湾や香港での実力闘争の敗北をとらえ返してというような発言も出ています(註2)。沖縄の基地反対闘争では座り込みの実力闘争が行われています。戦争法反対でも横浜の公聴会の場で座り込みがありました。脱原発・反原発でも大飯原発再稼働のときには現地で実力闘争を組んだという話があります。(註3)また反ヘイトでもデモを阻止すると座り込んだりします。非暴力実力闘争として、現在も関わられています。

そこでの混乱は非暴力という方法論的問題と、非暴力主義ということの区別がついていないということです。

非暴力主義は宗教性を帯びた思想的非暴力主義を指すようです。それは旧約聖書の中の「右の頬を打たれば左の頬を差し出せ」ということや、ガンジー的非暴力主義です。(註4)それは個人の思想信条の問題として、自分は決して暴力を振るわない、それで自分が殴られても決して手を出さないというのは、そのひとの個人的思想信条の問題です。ですが、自分の仲間が殴られていて、殺されるようなときに、黙ってみている、ただ止めろと叫ぶだけというようになるのでしょうか？

運動が怖いととらえられないように、非暴力の運動として運動を広げるために非暴力という方法をとるといふのを方法論的非暴力主義と名付けられるのではないかと考えています(註5)。

そもそもわたしたちの時代精神として、権力への抵抗から発する暴力への忌避感は余りなかったと思います。南ベトナム解放民族戦線の戦いをどうとらえるのかということで、そもそもその当時は米軍の非道さがきちんと報道されていたので、侵略的な戦争に対する闘いを非難するということは少なく、むしろ支持するという発信もなされていたのですから、(もちろん、その勢力が政権をとったらどうなるのかというところの路線の問題まで支持してはいなかったのですが)、そもそも非暴力主義ではなかったのです。その後権力マスコミ一体になった自分たちの暴力性をたなにあげた反暴力キャンペーンと、「内ゲバ」とそ

の報道の中で、非暴力主義ということが形成されたのだと思います。

そのあたりは、暴力を巡る、というよりそもそも総体的な運動の総括のようなことがきちんとなされないまま、運動がぼしょっていきことがあります。この本を読みながら、改めていろいろな立場からの自らの運動の総括を進める必要を感じ、それをまとめる形での運動総体の総括の必要性を感じています

さて、この本の中でも何回か出てくることがあります—それは全学連書記長であった、解放派の高橋さんを中核派が自己批判を求めてテロったというはなしです。その前に解放派の中核派へのゲバルトということもあったようなのですが、そのあたりの事実経過も含めてきちんとした総括が必要です。これが、「内ゲバ」の走りのようなこと、ブント内のテロも起きています（何が内か外かということも押さえる必要があるのですが）。このあたり「セクト主義」とか「組織の物神化」という中身なのですが、このあたりのこともきちんとした総括が必要になっているのだと思います。

誤解のないようにもう少しきちんと書いておきます。わたしは根源的非暴力主義—反暴力主義の立場です。すべての暴力に根源的に反対です。ですが、既に暴力が存在しているときに、この社会が差別という暴力でなりたち、現実には暴力が満ち満ちているときに、「すべての暴力に反対です」と、客観主義的に言われるのかという問題があります。もちろん、反差別という立場は、自分は差別されるのはいやだけど、差別するのはいいということではないわけで、自分の意見を力で相手に押しつけるというようなこと（これも暴力です）には根源的に反対するのですが、そもそも今の政治は、権力が権力意思を民衆に押しつけてきているわけです。それをはねのける、押し返すのが反暴力主義なわけです。無抵抗でいることは、暴力を容認することになります。もし、問題がそのことだけの問題であり、自分だけの問題ならば、そして宗教的非暴力主義ならば、非暴力主義を貫けるのかもしれませんが、そのような問題でないところで、非暴力主義の立場にたちえません。もちろん、安易な暴力など容認できないし、自ら痛みをもった抵抗としての暴力、暴力を否定するが故の暴力の行使ということになるのだと思います。

こんなことを、この本を読みながら考えていました。

さて、シールズや反原連のことについて、いろいろコメントしていますが、あえてコメントしているのですが、そもそも過去の世代からするとどうも分からない運動になっているということは、わたしたちや過去の世代が、きちんと運動の総括をなしえないで、伝えきれない中で、切断されているというところで起きている問題なのです。総括は、まず自己総括からということで、その総括ということも含めて、この本もそのような意味もっていることとして、この本があり、その本を巡る対話、わたしの文もあるのだと思います。他のところでの対話や文を書く行為自体が、わたし自身の総括、そしてわたしたちの世代の共同の総括、そして通時的な総括の座標になるのだと思います。

註 1

ブログ 329・討議-小熊英二×ミサオ・レッドウルフ×奥田愛基「<官邸前>から<国会前>へ」(『現代思想 2016年3月号 特集=3・11以後の社会運動』青土社 2016 所収)で、小熊さんは、2015年戦争法反対の運動と60年代後半から70年代の運動を比較して、後者は

マイノリティだったから過激化した、という主旨のことを書いているのですが、後者の方が、社会的関心も高く、そして支持もあったのではないかと思います。時代精神を読み違えています。きちんと、その時代をとらえ返す資料が少ない中で、インタビューもしないで本を書いているから、そんな錯誤の文になってしまうのだと思います。そういう意味で、この本の出版の意味が大きいのだと思います。

註 2

これは、誰の発言かどこかで見たのですが、文献をさがせません。わたしはそもそも運動というのはほとんど敗北に終わるものだと押さえています。その敗北の中で、何を勝ち取っていくのかということが問題なのだと思います。たとえば、樺美智子さんの死は死を許してしまった、しかも偽りのキャンペーンに屈してしまった（そちらの方が流布した）というひとつの敗北ですが、それでも彼女は実力闘争を組む運動の中で生きています。今、実力闘争自体を忌避するようになっていくとき、そのことが危うくなっていくのですが。

台湾、香港の運動の敗北とか、簡単に言うけれど、わたしはその運動の中で獲得されたものが、将来の運動の中で生きていくとしたら、単なる敗北でもありません。何ををもって敗北と言っているのか分からないのです。

ブログ 356・SEALDs×上野千鶴子「上野千鶴子（社会学者）×福田和香子、奥田愛基、牛田悦正（SEALDs）対話」（at プラス web）2016 で、上野千鶴子さんは実力闘争をすれば潰されるとか、というようなニュアンスの発言を繰り返しています。実力闘争をしたから、潰されたのではないのです。それに繰り返しますが、確かにほとんどの闘いは敗北に終わります。そもそも、その中で次の闘いを準備して、飛躍させていくのです。その回路をもった闘いが必要なのです。

註 3

ブログ 412 野間易通『金曜官邸前抗議 ---デモの声が政治を変える』河出書房新社 2012 で、野間さんは大飯原発再稼働反対の運動に関して、地域では現実的被害がはっきり分かるから実力闘争を組める、けど東京では実力闘争は組めないとかいうことを書いているのですが、それは想像の欠如のようなことではないかと思うのです。原発事故はもう起きたのです。もう一度起きる、そのことがどう自らに影響を及ぼすのかを想像できないのでしょうか？ もっと言えば現実に被害にあったひとたちの痛みを、自らの痛みとして共有化できないのでしょうか？ 確かに温度差があるにせよ、民衆の怒りのようなことで、決壊を起こしたというのは、ひとつの実力闘争ではなかったのでしょうか？

註 4

ガンジー的非暴力主義を、野間さんは、屍越える運動としてとらえて、自分はそのようなところには組まないようなニュアンスの文を書いています。ちなみに、野間さんは警察はほんとの敵でない、として警察を柵にみたて、鉄柵の隙間からつぶてを投げるといようなことを書いています。つぶてを投げるといふのだから、非暴力主義者ではないようなのです。鉄柵の例はわかりやすいので、わたしも援用しますが(もちろん警察官といえどもひとは鉄柵というものではないということは押さえた上で)、10・8以降の実力闘争は鉄柵をなぎ倒して敵に迫る闘争だったのだと思います。鉄柵を潰すということは目的ではない

し、そんなことをしても意味がありません。ただ、そこに鉄柵があり、敵に迫るのを妨げるから、なぎ倒す、押し込むということをやるのだと思います。2015年国会前で起きていた鉄柵を巡る攻防や決壊もそのようなこととしてあったのだと思うのです。今日の実力闘争をも端から否定した主催者はそのあたりのことどうとらえていたのでしょうかー実力闘争をしないという堅い決意をもって忌まわしくとらえていたのでしょうか？ 上野千鶴子さんが「国会に突入していたら運動はつぶされていた」というような発言をしています。60年安保のときの樺美智子さんの死をどうとらえているのか、よく分かりません。わたしは彼女の死は、60年代以降の運動の中に引き継がれたのだと思います。

もうひとつ書いておけば、そもそもガンジー的非暴力主義は、インド独立闘争を闘ったガンジーが、カースト制度を撤廃するためにはむしろイギリス支配の方が良いというアウト・カーストのひとたちの主張に対して、ハンストをもって独立運動の統一を図り、結果としてカースト制度という差別制度を残すことになった。そこにおいて、ガンジーの非暴力主義は差別という暴力を残すという意味で非暴力主義になっていないという批判も出ています。

註5

方法論的非暴力行動というのは、戦術的非暴力行動という言い方をされていました。軍事用語的になるので、反戦ー反軍の立場としては、方法論的非暴力というあまり聞き慣れないことばを使っています。

たわしの読書メモ・・ブログ 417

・佐々木隆治『カール・マルクス：「資本主義」と闘った社会思想家』（ちくま新書）筑摩書房 2016

ブログ 206 佐々木隆治『マルクスの物象化論 資本主義批判としての素材の思想』社会評論社 2011の本を読んでいて、この本を書店の本棚で見つけ、買った本です。知り合いのひとがこの本を紹介していて、改めて読まなくてはと気になっていて、やっと読みました。

マルクスの思想遍歴というところでの入門書で、第1章が、初期マルクス、マルクスの思想形成過程。第2章に『資本論』に関する解説があります。第3章は、後期、晩期マルクスで、「資本論草稿群」とか書簡をとりあげています。

さて、『マルクスの物象化論』は、わたしの「廣松物象化論」学習とのつながりで手にした本。廣松物象化論はマルクスの物象論をさらに認識論的に深化させた論攷なのですが、この本の著者は、マルクスの物象化論とは違うと、余り意味をとらえ返せていないようでした。ですから、ちょっと積ん読してしまっていたのですが。この本の第3章は、わたしの反差別論との関係で、気になっている後期ー晩期マルクスに関する論攷です。「マルクスは、差別の問題をとらえ返せていなかった」という言説に対して、後期ー晩期マルクスには、そのあたりのことを古代社会ノートとか共同体研究とか、農業、地質学、というところにも手を出し、今日いうエコロジー的なところの研究にも手を出していた、その中でマルクスが特に気になっているひとがフラスという「人間の耕作活動が引き起こす気候変動について分析した「自然学的な学派」にも注目する」226Pひとのようです。

そのようなところに反差別の芽があるということをわたしはとらえ返していました。

廣松さんの共著に『資本論を物象化論を視軸にして読む』という本があるのですが、この著者は「物質代謝」という概念で、『資本論』や「資本論草稿」を読み解こうとしているようです。

このあたりは「じつは物質代謝論は『資本論』全篇をつらぬく基本視角だと言っても過言ではない。」206Pという文章があります。

「物質代謝」ということばの語源についての説明は「物質代謝という言葉は、もともとドイツ語でシトッフヴェルセル(Stoffwechsel)という「素材」意味するシトッフと「変換」を意味するヴェクセルとの合成語である。」211P

さて、もうひとつマルクスの生産力中心主義的などころから後期マルクスは脱していったということが、「マルクスは初期の「生産力中心主義的」な見地を乗り越え、むしろ資本主義的生産様式においては合理的な生産力が実現できないことを明らかにした。」221Pとして出ています。このあたりも反差別論に関して大切な論攷になります。

以上、だいたいマルクス学習の復習のようなこととして共鳴しながら読んでいたのですが、ちょっと疑問に思ったこと二つ。

ひとつは、労働論です。「このような、人間に固有な、自然との物質代謝の意識的媒介のことをマルクスは労働と呼んだ。すなわち、労働とは、人間が自然との物質代謝を自分の意識的行為によって媒介し、規制し、制御することにほかならない。」208P、この論攷で、差別されるもので、唯一マジョリティであるプロレタリアートを革命の中心に置くということがあり、そこから逆規定されて、労働という概念自体をとらえ損なうということがおきているのではないか、と思うのです。というより、あえてポスト構造主義の概念をもちいれば、「労働概念の脱構築」ということが必要になっていて、今村仁司さんの概念を持ち出せば、「労働の廃棄、労働の仕事化」という観点からこのあたりを押さえ直す必要を感じています。

もうひとつは、晩期マルクスの中にジェンダー論を読み解こうとしているのですが241-245P、そもそもジェンダーという性役割分業という概念自体をこの著者が持ち出しているところから、「女性という性の自然性」という概念にとらわれているのではないかと思います。そもそも、マルクス自身がどういうメモを残しているかの研究も含めて検証していく必要を感じています。このあたりは、むしろ男の限界を突破するフェミニストのひとたちの研究課題かもしれません。

この著者はMEGA(マルクス・エンゲルス全集)の編集に関わっているとのこと、大月版のこれまでであったのもMEGAと言われていたのですが、実は「著作集」とのことで(旧MEGAとも言われているのですが)、新MEGAとも言われていた、このMEGA発刊が早くなされることを期待しています。反差別論の立場で貴重な資料となりそうなのですが、どうも、わたしには間に合いそうにありません。少しずつ段階的に出されているものとして、「資本論草稿」を読みたいと思っています。何を言っているのかということきちんと検証し、その上でまだ残る限界を突破していく論の深化を勝ち取るためにも。そもそも、まだ、ちょっとしか揃えていないし、いつになるか、また課題が増えていきますー

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 67 号」アップ(17/12/12)

◆ホームページのプロバイダーがサービスを停止することになり、ホームページをリニューアルしました。新しい URL は最後のところに載せています。リニューアルにつき、会の名称もきちんと「反障害－反差別研究会」に統一しました。また、この際に共同作業に踏み込もうと、入ってもらえる形で、会の方針とかも案ということで、提示しているのですが、こちらはなかなかうまく行きそうにありません。

◆「反差別資料室」という形で、もうひとつHPを作りました。こちらには草案段階の文を載せていきます。また文献の整理もこちらの方でやろうと思っていますが、ちょっと本格的にやり始めるのには時間がかかりそうです。

◆「たわしの対話を求めて」というブログは読書メモ・映像鑑賞メモに純化しています。

(編集後記)

◆いろいろ考え込むことがあって、表に出さぬままの文を書いていたりしていたのですが、隔月刊が守れました。

◆「巻頭言」と「状況へのコメント」はほぼ重なった内容、コメントをつけて問題を暴露していくこと、真面目な文とシニカルな文を併記させて見ました。こういう文はほんとに疲れます。先の衆議院選挙がまさに、まんまとアベのごまかし政治の策略にまんまとはまってしまうました。なんでこんなウソとごまかしの政治が続くのだろうと、それでもこつこつと暴露・コメントの文をめげずに書いていかななくてはなりません。

◆「読書メモ」は、今回は運動の総括に関する文とか読み落としていたものとか、読んでいました。結局、理論的にはマルクス－レーニン主義への批判が必要になっているのではと、レーニンの運動論・組織論関係の文を読み始めています。後期・晩期マルクスに早く入りたいのですが、「レーニンなんか」と捨て置いていたこと、やはり総括のようなことで押さえておかななくてはと、踏み込みました。障害学関係の本が気になっていて、イギリス障害学を押さえるために、翻訳本がないので英語の勉強まで始め、焦りのようなことにとらわれて来ています。

◆「反差別原論」の断章は、今回もお休みです。これもなんとかやりきらないと。

◆「共に情報・コミュニケーション・アクセス保障を考える会」を始動しようと模索しています。そこで、今回の、「もりかけ」の問題を見てみると、「保障」以前の役人の文書の破棄ということでの問題の隠蔽工作が明らかになってきています。そもそも、保存期間を限定していることが信じられません。しかも、紛失したとか言っています。税金から出ている給料をもらって仕事をしている役人が公務中に作った文書は、「国民の財産」です。そもそも紛失や破棄などしていないで、どこかに残っているはずなのです。意図的に廃棄したのなら、「背任罪」です。一体どちらを向いて仕事をしているのか分からないのです。

「付度」ということばが、今年の流行語大賞を受けました。わたしは、それを「印籠－付度政治」と名付けました。いったい自分の公務員としての、「国民の公僕」としての責任を感じないのでしょ

民主党政権時代に、政治主導の政治を謳い、官僚支配を崩そうとしたのに、見事に失敗しました。それに抵抗していた官僚が、こんなにももの見事に屈していくのでしょうか？

この問題は情報公開の問題につながっています。注目されるのが好きで、リップサービスの思いつき発言に過ぎないのですが、緑の狸が、「情報公開が、民主主義の一丁目一番地」と言っていました。どう考えても、日頃の発言からすると、墓穴掘りとしか思えないのです。

この情報公開が、それにつながる情報保障が、まさにひとつの焦点になっていくのではと思います。

◆最近、議論が成り立たないということを、ほんとに感じてきています。文を書いても、ちゃんと読んで論理的に考えるということ自体がなく、感情的な反発のようなことで、議論が成り立たなくなるのです。対話を成立させるには、どうすればいいか、ちゃんと考えて行かなくてはならないと思っています。

反障害－反差別研究会

■ 会の方針

「障害とは何か」というところでの議論の混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げています。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この会でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成のためにあります。会としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会をかえようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としなが議論していきたいと考えていきます。

■連絡先

E メール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧

<http://www.taica.info/kh.html>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>